

箴

言

イ王上四・三二	箴	水詩七八・二	リ耶五・二六	一五	レ賽六五・二二、六六
一〇・一、二五・一	ハ伯二八・二八	詩一	又詩二八・一、一四三	六・二〇	・四、耶七・一三
傳一・二・九	一・二・一〇	箴九	七	六・二〇	・四、耶七・一三
箴二・一・九	一〇傳一・二・一三	ル詩一・一・一四	ヨ箴八・一、九・三	ヨ約七・三七	・四、耶七・一三
ハ箴九・四	ト箴四・一、六・二〇	ヲ詩一九・一〇一	ヨ約七・三七	ヨ約七・三七	・四、耶七・一三
二箴九・九	チ箴三・二二	ワ賽五九・七	羅三	タ耳二・二八	・四、耶七・一三

第一章

ダビデの子イスラエルの王ソロモンの箴言

これは人に智慧と訓誨とをしらしめ哲言を曉らせ

さとき訓と公義と公平と正直とをえしめ 拙者にさとりを與へ少者に知識と謹慎とを得させ

ん爲なり 智慧ある者は之を聞て學にすゝみ 哲者は智略をうべし 人これによりて箴言と譬喩と智慧ある

者の言とその隠語とを悟らん エホバを畏るゝは知識の本なり 愚なる者は智慧と訓誨とを輕んず 我

が子よ汝の父の教をきけ 汝の母の法を棄ることなかれ これ汝の首の美しき冠となり 汝の項の妝飾とならん

わが子よ惡者なんぢを誘ふとも從ふことなかれ 彼等なんぢにむかひて請ふわれらと偕にきたれ我儕まち

ぶせして人の血を流し 無辜ものを故なきに伏てねらひ 陰府のごとく彼等を活たるまゝにて呑み 壯健なる者

を墳に下る者のごとくになさん われら各様のたふとき財寶をえ 奪ひ取たる物をもて我儕の家に盈さん 汝

われらと偕に籤をひけ 我儕とともに一の金囊を持べしと云とも 我が子よ彼等とともに途を歩むことなかれ

汝の足を禁めてその路にゆくこと勿れ そは彼らの足は惡に趨り 血を流さんとして急げばなり (すべて鳥の

眼の前にて羅を張は徒勞なり) 彼等はおのれの血のために埋伏し おのれの命をふしてねらふ 凡て利を貪

る者の途はかくの如し 是その持主をして生命をうしなはしむるなり 智慧外に呼はり 衢に其聲をあげ

熱開しき所にさけび 城市の門の口邑の中にその言をのべていふ なんぢら拙者のつたなきを愛し 嘲笑者

のあざけりを樂しみ 愚なる者の知識を惡むは幾時までぞや わが督斥にしたがひて心を改めよ 視よわれ我が

靈を汝らにそゝぎ 我が言をなんぢらに示さん われ呼たれども汝らこたへず 手を伸たれども顧る者なく

中詩三七・二九
 ノ伯一八・一七 詩
 三・二八・一〇四
 三五
 オ申八・一、三〇・
 一六・二〇
 ク詩一九・二六五
 中出三一・九 申六・
 八 鐵六・二一、七
 三
 一七一・七一 哥後三
 一六・二〇
 ケ詩二一・一〇
 フ詩三七・三、五
 コ耶九・三三
 エ代上二八・九
 テ耶一〇・二三
 ア羅一二・二六
 サ伯一・一 鐵二六・
 六
 キ伯二一・二四
 エ出三三・二九、三三
 二九、三四・二六
 申二六・二 馬三・
 一〇 路一四・二三
 一〇 申二八・八
 ミ伯五・一七 詩九四
 二二 來一二・五、
 六 默三・一九
 シ申八・五
 一〇 鐵八・三四、三五
 二 伯二八・一三 鐵二・
 四、八・一一、一九、
 一六・一六
 モ太一三・四四
 七 鐵八・一八 提前四
 二七 耶一〇・一二、
 八
 ス太一一・二九、三〇
 イ則二・九、三・三二
 ロ詩一〇四・二四、
 一三六・五 鐵八・
 五二・一五
 ハ則一・九

一九 家は死に下りその途は陰府に赴く 凡てかれにゆく者は歸らずまた生命の途に達らざるなり 聰明汝を
 三 たちてよき途に行ませ 義人の途を守らしめん 二 其は義人は地にながらへをり 完全者は地に止らん
 三 されど悪者は地より亡され 悖逆者は地より拔さらるべし

第三章

一 我が子よわが法を忘るゝなかれ 汝の心にわが誠命をまもれ 二 さらに此事は汝の日をながくし
 生命の年を延べ平康をなんぢに加ふべし 三 仁慈と眞實とを汝より離すことなかれ 之を汝の項に

五 四 五 四 三 二 一 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇

六 てエホバに倚頼め おのれの聰明に倚ることなかれ 汝すべての途にてエホバをみとめよ さらばなんぢの途を
 直くしたまふべし 七 自から見て聰明とする勿れ エホバを畏れて惡を離れよ 八 これ汝の身に良藥となり 汝の
 骨に滋潤とならん 九 汝の貨財と汝がすべての産物の初生をもてエホバをあがめよ 一〇 さらに汝の倉庫はみちて

二 餘り 汝の酒酔は新しき酒にて溢れん 一 我子よ汝エホバの懲治をかるんずる勿れ その譴責を受くるを厭ふこと
 勿れ 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇

一 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇

一 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇

二〇 之を持ものは福なり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇

三二 わきいで 雲は露をそぐなり 我が子よこれらを汝の眼より離す勿れ 聰明と謹慎とを守れ 然ばこれは汝
 三三 の靈魂の生命となり 汝の項の妝飾とならん かくて汝やすらかに汝の途をゆかん 又なんぢの足つまづかじ
 三四 なんぢ臥とき怖るゝところあらず 臥ときは酣く睡らん なんぢ猝然なる恐懼をおそれず 悪者の滅亡きた
 三五 る時も之を怖るまじ 汝の倚頼むものにして 汝の足を守りてとらはれしめたまはざるべければ
 三六 なり 汝の手善をなす力あらば之を爲すべき者に爲さざること勿れ もし汝に物あらば 汝の鄰に向ひ
 三七 去て復來れ 明日われ汝に予へんといふなかれ 汝の鄰なんぢの傍に安らかに居らば之にむかひて悪を謀ること
 三八 勿れ 人もし汝に悪を爲さずば故なく之と争ふこと勿れ 暴虐人を羨むことなく そのすべての途を好と
 三九 することなかれ 是は邪曲なる者はエホバに悪まるればなり されど義者はその親き者とせらるべし エホ
 四〇 バの呪詛は悪者の家にあり されど義者の室はかれにめぐまる 彼は嘲笑者をあざけり 謙る者に恩恵をあた
 四一 へたまふ 智者は尊榮をえ 愚なる者は羞辱之をとりさるべし

第四章

一 小子等よ父の訓をきけ 聰明を知らんために耳をかたむけよ われ善教を汝らにさづく わが律を
 二 棄つることなかれ われも我が父には子にして 我が母の目には獨の愛子なりき 父われを教
 三 へていへらく我が言を汝の心にとどめ わが誠命をまもれ 然らば生べし 智慧をえ 聰明をえよ これを忘るゝ
 四 なかれ また我が口の言に身をそむくるなかれ 智慧をすつることなかれ 彼なんぢを守らん 彼を愛せよ 彼なん
 五 ぢを保たん 智慧は第一なるものなり 智慧をえよ 凡て汝の得たる物をもて聰明をえよ 彼を尊べ さらば
 六 七 八

- イ申三三・二八 伯 九
- 三六・二八 二利二六・六 詩三
- 口三・九 五、四・八
- ハ詩三七・二四、九一 ホ詩九一・五、一一二
- 一一、一二 詩一〇 七
- ヘ羅一三・七 加六・ 七 詩三七・一、七三・三
- 一〇 二四・一
- ト利一九・一三 申 又詩二五・一四
- 二四・一五 九 利二六・一四 詩 九 詩三四・一一 詩一
- チ羅二二・二八 三七・二二 亞五・四 八
- 馬二・二
- ヲ詩一・三
- ワ雅四・六 彼前五・五
- カ詩三四・一一 詩一
- レ詩七・二
- ソ詩二二・三
- ヨ代上二九・一
- 夕代上二八・九 弗六
- ネ太一三・四四
- 一〇・四二
- ナ彼前二・三〇
- ツ彼後二・一〇
- ネ太一三・四四 路
- ラ詩一・九、三・三二
- ム詩三・二
- ウ詩一八・三六
- ホ詩九一・一一、一二

ノ詩一・二・三・一〇、
一五 夕太五・一四、四五 十 後三三・四
オ詩三六・四 察五七 二・一五 二・一五 五・六 察五九・九、ケ 三三・三二
一〇 三三・三二 一〇 三三・三二 一〇 三三・三二 一〇 三三・三二
一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七
ア 馬二・七 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七
サ 三二・一六、六・二四 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七
キ 詩五五・二一 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七
エ 傳七・二六 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七
メ 來四・二二 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七
ミ 七・二七 一四 書一・七 一四 書一・七 一四 書一・七

九 彼なんぢを高く擧げんもし彼を懐かば彼汝を尊榮からしめん 九 かれ美しき飾を汝の首に置き榮の冠弁を汝に
二〇 予へん 一〇 我が子よきけ 我が言を納れよさらば汝の生命の年おほからん 二二 われ智慧の道を汝に教へ義しき
二二 徑筋に汝を導けり 歩くとき汝の歩は艱まず 趨るときも蹶かじ 堅く訓誨を執りて離すこと勿れ これを守
二四 れこれは汝の生命なり 邪曲なる者の途に入ることもなかれ 悪者の路をあゆむこと勿れ これを避よ 過る
二六 こと勿れ 離れて去れ 一六 そは彼等は悪を爲さざれば睡らず 人を蹶かせざればいねず 一七 不義のパンを食ひ暴虐
二八 の酒を飲めばなり 一八 義者の途は旭光のごとしいよいよ光輝をまして晝の正午にいたる 一九 悪者の途は幽冥の
三〇 ごとし 彼らはその躓くものなになるを知らざるなり 二〇 わが子よ我が言をきけ 我が語るところに汝の耳を
三二 傾けよ 三二 これを汝の目より離すこと勿れ 汝の心のうちに守れ 三三 是は之を得るものの生命にしてまたその全體
三三 の良薬なり 三三 すべての操守べき物よりもまさりて汝の心を守れ そは生命の流これより出ればなり 三四 虚偽の口
三五 を汝より棄さり 悪き口唇を汝より遠くはなせ 三五 汝の目は正しく視 汝の眼瞼は汝の前を眞直に視るべし 三六 汝の
三六 足の徑をかながへはかり 汝のすべての道を直くせよ 三六 右にも左にも偏ること勿れ 汝の足を悪より離れしめよ
三七 一 我が子よわが智慧をきけ 汝の耳をわが聰明に傾け 二 しかしてなんぢ謹慎を守り 汝の口唇に知
三五 識を保つべし 三六 娼妓の口唇は蜜を滴らし 其口は脂よりも滑なり 四 されど其終は茵蔯の如くに
三八 苦く 兩刃の劍の如くに利し 五 その足は死に下り 其の歩は陰府に趣く 六 彼は生命の途に入らず 其徑はさだか
三九 ならねども自ら之を知ざるなり 七 小子等よいま我にきけ 我が口の言を棄つる勿れ 八 汝の途を彼より
四〇 遠く離れしめよ 其家の門に近づくことなかれ 九 恐くは汝の榮を他人にわたし 汝の年を憐憫なき者にわたすに

第五章

二〇 いたらん 恐くは他人なんぢの資財によりて盈され 汝の勞苦は他人の家にあらん 終にいたりて汝の身な

三三 んぢの體亡ぶる時 なんぢ泣悲みていはん われ教をいとひ 心に譴責をかるんじ 我が師の聲をきかず

二四 我を教ふる者に耳を傾けず あつまりの中會衆のうちにてほとんど諸の惡に陥れりと 汝おのれの

二六 水溜より水を飲み おのれの泉より流るゝ水をのめ 汝の流をほかに溢れしめ 汝の河の水を衝に流れしむべけ

二七 んや これを自己に歸せしめ 他人をして汝と偕に之に與らしむること勿れ 汝の泉に福祉を受しめ 汝の

一九 少き時の妻を樂しめ 彼は愛しき鷹のごとく 美しき鹿の如しその乳房をもて常にたれりとしその愛をもて

三〇 常によろこべ 我子よ何なればあそびめをたのしみ 淫婦の胸を懷くや それ人の途はエホバの目の前に

三三 あり彼はすべて其行爲を量りたまふ 惡者はおのれの愆にとらへられその罪の繩に繋る 彼は訓誨なき

によりて死 その多くの愚なることに由りて亡ぶべし

二一 我子よ汝もし朋友のために保証をなし 他人のために汝の手を拍ば 汝その口の言によりて

三 救へすなはち往て自ら謙だり只管なんぢの友に求め 汝の目をして睡らしむることなく 汝の眼瞼をして閉し

四 むること勿れ かりうどの手より鹿のがるゝごとく 鳥とる者の手より鳥のがるゝ如くしてみづからを救

六 へ 者よ蟻にゆき其爲すところを觀て智慧をえよ 蟻は首領なく有司なく君王なけれども 夏の

八 うちに食をそなへ 收穫のときに糧を斂む 情者よ汝いつれの時まで臥息むや いつれの時まで睡りて起さ

九 るや しばらく臥ししばらく睡り手を又きてまた片時やすむ さらば汝の貧窮は盜人の如くきたり 汝の

第六章

イ 箴一・二九、二・九、四・五、八代下・一六・九、伯・二七、三三・一九、チ 伯四・二二、三六、一八、二〇・一六、又 時一三三・四、九、二〇・四、一三、
ロ 箴一・二五、一・二二、七・三、三一・四、三四・二二、何七・二、來四・一三、一一二、三三・二六、二七、九、伯二・二七、
ハ 馬二・二四、六・二六、七・五、箴一・五、三、耶一六、ト 時九・一五、リ 箴一・一五、一七、一三、ヲ 箴三四・三三、三四、
リ 箴一〇・四、一三、

カ伯一五・一二 詩ノ代下三六・一六 ナ賽一・一五 一九五・九 中鏡二・二一 フ太五・二八 サ鏡七・七
三五・一九 鏡一〇 ソ耶一九・二一 ラ創六・五 中鏡六・一四 マ詩一九・八、一一九 コ鏡二九・三
ヨ米二・一 一〇一・五 ツ詩一八・二七、 ム察五九・七 羅三、 ノ鏡一・八 弗六・一 二〇五 エ創三九・一四
夕鏡六・一九 一〇一・五 一〇一・五 才鏡三・三、七・三、 ケ鏡二・一六、五・三、 一三八 一三八 一三八
ネ詩二二〇・二、三、 ウ詩二七・一二 鏡 夕鏡三・二、三、二、四 七・五 ア出二二・一、四

二三 缺乏は兵士の如くきたるべし 邪曲なる人あしき人は虚偽の言をもて事を行ふ 彼は眼をもて眇せし脚を
二四 もてしらせ 指をもて示す 其の心に虚偽をたもち常に悪をはかり 争端を起す この故にその禍害にはか
二五 に来り 援助なくして立刻に敗らるべし エホバの憎みたまふもの六あり 否その心に嫌ひたまふもの七あり
二六 即ち驕る目 いつはりをいふ舌 つみなき人の血を流す手 悪き謀計をめぐらす心 すみやかに悪に趨る足
二七 詐偽をのぶる證人 および兄弟のうち争端をおこす者なり 我子よ汝の父の誠命を守り 汝の母の法
二八 を棄る勿れ 常にこれを汝の心にむすび之をなんぢの頸に佩よ これは汝のゆくとき汝をみちびき汝の寝
二九 るとき汝をまもり 汝の寤るとき汝とかたらん それ誠命は燈火なり 法は光なり 教訓の懲治は生命の道なり
三〇 これは汝をまもりて悪き婦よりまぬかれしめ 汝をたもちて淫婦の舌の諂媚にまどはされざらしめん その
三一 艶美を心に戀ふことなかれ その眼瞼に捕へらるること勿れ それ娼妓のために人はたゞ僅に一撮の糧をの
三二 こすのみにいたる 又淫婦は人の貴き生命を求むるなり 人は火を懷に抱きてその衣を焚れざらんや 人は
三三 熱火を踏て其足を焚れざらんや その隣りの妻と姦淫をおこなふ者もかくあるべし 凡て之に捫る者は罪なしと
三四 せられず 竊む者もし飢しときに其飢を充さん爲にぬすめるならば人これを藐せし もし捕へられればその
三五 七倍を償ひ其家の所有をことごとく出さざるべからず 婦と姦淫をおこなふ者は智慧なきなり 之を行ふ者は
その怨を報ゆるときかならず寛さじ 傷と凌辱とをうけて其恥を雪ぐこと能はず 嫉忌その夫をして忿怒をもやさしむれば
いかなる贖物をも顧みず 衆多の饋物をなすともやはらがさるべし

第七章

一 我子よわが言をまもり我が誠命を汝の心にたくはへよ 我が誠命をまもりて生命をえよ 我法を
 守ること汝の眸子を守るが如くせよ 三 これを汝の指にむすびこれを汝の心の碑に銘せ 四 なん
 ぢ智慧にむかひて汝はわが姉妹なりといひ明理にむかひて汝はわが友なりといへ 五 さらば汝をまもりて淫婦
 にまよはざらしめ言をもて媚る娼妓にとほざからしめん 六 われ我室の牖により榘子よりのぞきて 拙き者の
 うち幼弱者のうちに 一人の智慧なき者あるを觀たり 八 彼衝をすぎ婦の門にちかづき其家の路にゆき 九 黄昏
 に半宵に夜半に黑暗の中にあるけり 一〇 時に娼妓の衣を着たる狡らなる婦かれにあふ 二 この婦は譁しくして
 つしみななく其足は家に止らず 三 あるときは衢にあり 或時はひろばにあり すみずみにたちて人をうかどふ
 二 三 この婦かれをひきて接吻し 恥しらぬ面をもていひけるは 一四 われ酬恩祭を獻げ今日すでにわが誓願を償せり
 二五 これによりて我なんぢを迎へんとていで 汝の面をたづねて汝に逢へり 一六 わが榻には美しき褥およびエジプ
 トの文泉をしき 一七 没薬 蘆薈 桂皮をもて我が榻にそよげり 一八 來れわれら詰朝まで情をつくし愛をかよはして
 相なぐさめん 一九 そは夫は家にあらず遠く旅立して 二〇 手に金囊をとれり 望月ならでは家に歸らじと 二一 多の
 婉 言をもて惑し 口唇の諂媚をもて誘へば 二二 わかき人たゞちにこれに隨へり あだかも牛の宰地にゆくが
 如く 愚なる者の桎梏をかけらるゝ爲にゆくが如し 二三 遂には矢その肝を刺さん 鳥の速かに羅にいりてその生命
 を喪ふに至るを知らざるがごとし 二四 小子等よいま我にきけ 我が口の言に耳を傾けよ 二五 なんぢの心を淫婦
 の道にかたむくこと勿れ またこれが徑に迷ふこと勿れ 二六 そは彼は多の人を傷つけて仆せり 彼に殺されたる
 者ぞ多かる 二七 その家は陰府の途にして死の室に下りゆく

イ箴二・一 八中三三・一〇 六箴二・一六、五・三、 一六 提前五・一三 多二 ル箴五・三
 口利一八・五 箴四・ 二中六・八、一一・一八 六・二四 ト伯二四・一五 五 詩一・二二
 四 箴五五・三 箴三・三、六・二二 へ箴六・三二、九・四、 七箴九・二三 二 傳九・一二
 カ尼二三・二六 九・一八

多讀一・二〇、九・三
レ讀三・二〇
ソ伯二八・一五—二三
詩一九・一〇、五・七、一六・一六
一・一
ナ讀四・二四
ラ傳七・一九
ム但二・二二
羅一三
ウ擧前二・三〇
九一・二四
約一四
ノ讀三・一六
太六・
ク讀三・一九約一・一
三三
オ讀三・一四、八・一〇
マ伯一五・七、八
マ詩二・六

第八章

智慧は呼はらざるか 聰明は聲を出さざるか 彼は路のほとりの高處また街衢のなかに立ち

もて人の子等をよぶ 拙き者よなんぢら聰明に明かなれ 愚なる者よ汝ら明かなる心を得よ 汝きけわれ

善事をかたらん わが口唇をひらきて正 事をいださん 我が口は眞實を述べ わが口唇はあしき事を憎むなり

わが口の言はみな義し そのうちに虚偽と奸邪とあることなし 是みな智者の明かにするところ 知識をうる

者の正とするところなり なんぢら銀をうくるよりは我が教をうけよ 精金よりもむしろ知識をえよ

智慧は眞珠に愈れり 凡の寶も之に比ぶるに足らず われ智慧は聰明をすみかとし 知識と謹慎にいたる

エホバを畏るゝとは惡を憎むことなり 我は傲慢と驕奢 惡道と虚偽の口とを憎む 謀略と聰明は我にあり

我は了知なり 我は能力あり 我に由て王者は政をなし 君たる者は義しき律をたて 我によりて主たる者お

よび牧伯たちなど凡て地の審判人は世ををさむ われを愛する者は我これを愛す 我を切に求むるものは我に

遇ん 富と榮とは我にあり 貴き寶と公義とも亦然り わが果は金よりも精金よりも愈り わが利は精銀よりも

もよし 我は義しき道にあゆみ 公平なる路徑のなかを行む これ我を愛する者に貨財をえさせ 又その庫を

充しめん爲なり エホバいにしへ其御わざをなしそめたまへる前に その道の始として我をつくりたまひき

永遠より元始より地の有ざりし前より我は立られ いまだ海洋あらず いまだ大なるみづの泉あらず

とき我すでに生れ 山いまださだめられず 陵いまだ有ざりし前に我すでに生れたり 即ち神いまだ地をも

野をも地の塵の根元をも造り給はざりし時なり かれ天をつくり 海の面に穹蒼を張たまひしとき我かしこに

二八 在りき 彼うへに雲氣をかたく定め 淵の泉をつよくならしめ 海にその限界をたて 水をしてその岸を踏え
 二九 ざらしめ また地の基を定めたまへるとき 我はその傍にありて創造者となり 日々に欣び 恒にその前に樂み
 三〇 その地にて樂み 又世の人を喜べり されば小子等よ いま我にきけ わが道をまもる者は福ひなり
 三一 教をきよて智慧をえよ 之を棄ることなかれ 凡そ我にきよ 日々わが門の傍にまち わが戸口の柱のわき
 三二 にたつ人は福ひなり そは我を得る者は生命をえ エホバより恩寵を獲ればなり 我を失ふものは自己の生命
 三三 を害ふすべて我を惡むものは死を愛するなり

第九章

一 智慧はその家を建て その七の柱を砍成し その畜を宰り その酒を混和せ その筵をそなへ
 二 その婢女をつかはして邑の高處に呼はりいはしむ 拙者よこゝに來れとまた智慧なき者
 三 汝等きたりて我が糧を食ひ わがませあはせたる酒をのみ 拙劣をすてて生命をえ 聰明のみちを行
 四 め 嘲笑者をいましむる者は恥を己にえ 惡人を責むる者は疵を己にえん 嘲笑者を責むることなかれ
 五 恐くは彼なんぢを惡まん 智慧ある者をせめよ 彼なんぢを愛せん 智慧ある者に授けよ 彼はますます智慧をえ
 六 義者を教へよ 彼は知識に進まん エホバを畏るゝことは智慧の根本なり 聖者を知るは聰明なり
 七 によりて汝の日は多くせられ 汝のいのちの年は増べし 汝もし智慧あらば自己のために智慧あるなり 汝もし
 八 嘲らば汝ひとり之を負ん 愚なる婦は嘩しく且つたなくして何事をも知らず その家の門に坐し 邑の
 九 たかき處にある座にすわり 道をますぐに過る往來の人を招きていふ 拙者よこゝに來れとまた智慧な

イ 伯三・九、一〇 伯二・三三、二七 西一・ト 箴三・一三、一八
 三三・一〇、一一 詩一三 箴二・二二 箴九・五、二三、三〇 歌五・一 ナ 伯二八・二八 詩一六・二六
 三三・七、一〇 四・九 詩一六・三 詩一〇・一五 賽五五・一 約六・一 一・一一、一〇 箴一 牛 箴九・三
 耶五・二二 詩一九・二、二二、又 太一六・一八 弗二 力 箴九・一四 二七 箴三・二、一六、一〇 牛 箴九・三
 伯三・八、四 一三八・二、二 路 二・一〇、一二 彼前 ヨ 箴八・二、二 ソ 太七・六 ラ 箴三・二、一六、一〇 牛 箴九・四
 ハ 約一・二、二、一八 一一・二八 二・五 太 六・三三、九、一六 詩一四一・五 二七 箴三・二、一六、一〇 牛 箴九・四

才敏二〇・一七 四路二二・一九 二二五
ク敏二・二八、七・二七 二〇 二二五
十敏一五・二〇、一七 七四四・二七 二二五
二二、二五、一九 一〇・一四、三四 二二五
一三、二九、三、一五 九、一〇、三七、二五 二二五
マ詩四九、六、一 一 二二四、一九 二二五

サ詩九・五、六、一一二 二二五
六傳八・一〇 二二五
シ詩三七・三〇 二二五
一三・一四、一八、四 二二五
エ詩一〇七、四二 二二五
一〇・六 二二五

ヒ敏一七・九 二二五
一三・四 二二五
モ敏二六・三 二二五
七敏一八・七、二一 二二五
二二三 二二五
ス伯三一・二四 二二五

五二・七 二二五
一 二二五
イ詩一五・三 二二五
ハ敏三・二 二二五
二四・三五、二六 二二五

一七八 盗人（ひと）にむかひては之（これ）にいふ 竊（ぬす）みたる水（みづ）は甘（あま）く密（ひそ）かに食（くら）ふ糧（かて）は美（よ）味（あじ）ありと 彼（か）處（ところ）に在（あ）る者（もの）は死（し）者（もの）その容（か）

は陰（よ）府（ふ）のふかき處（ところ）に在（あ）ることを是（こ）等（ら）の人（ひと）は知（し）らざるなり

第一〇章

一 ソロモン（ソロモンの）箴言（しんげん）

智慧（ち）ある子（こ）は父（ちち）を欣（よろこ）ばす 愚（おろ）かなる子（こ）は母（はは）の憂（うれ）なり

不（ふ）義（ぎ）の財（から）は益（えき）なし

二 されど正（た）義（ぎ）は救（すく）ひて死（し）を脱（た）かかれしむ エホバ（エホバ）は義（た）義（ぎ）者（もの）の靈（たま）魂（ま）を饑（う）えしめず 惡（あ）者（もの）にその欲（ほ）する

三 ところを得（え）ざらしむ 手（て）をものうくして動（は）つもの（もの）は貧（ま）しくなり 勤（つと）めはたらく者（もの）の手（て）は富（とみ）を得（え） 夏（なつ）のうちに斂（あつ）む

四 者（もの）は智（ち）き子（こ）なり 收（かり）穫（と）の時（とき）にねむる者（もの）は辱（は）をきたす子（こ）なり 義（た）義（ぎ）者（もの）の首（か）びには福（さい）祉（し）きたり 惡（あ）者（もの）の口（くち）は強（あ）暴（ぼう）を

五 掩（おほ）ふ 義（た）義（ぎ）者（もの）の名（な）は讚（ほ）まれ 惡（あ）者（もの）の名（な）は腐（く）る 心（こゝろ）の智（ち）き者（もの）は誠（まこと）命（めい）を受（う）くされど口（くち）の頑（おろ）愚（おろ）なる者（もの）は滅（ほろ）ぶ

六 くあゆむ者（もの）はそのあゆむこと安（やす）しされどその途（みち）を曲（ま）ぐる者（もの）は知（し）らるべし 眼（め）をもて胸（むね）せする者（もの）は憂（うれ）をおこし

七 口（くち）の頑（おろ）愚（おろ）なる者（もの）は亡（ほろ）ぶ 義（た）義（ぎ）者（もの）の口（くち）は生（いのち）命（めい）の泉（いづみ）なり 惡（あ）者（もの）の口（くち）は強（あ）暴（ぼう）を掩（おほ）ふ 怨（うら）みは争（あ）端（たん）をおこし 愛（あい）は

八 すべての愆（とが）を掩（おほ）ふ 哲（ち）者（もの）のくちびるには智（ち）慧（えい）あり 智（ち）慧（えい）なき者（もの）の背（せ）のためには鞭（むち）あり 智（ち）慧（えい）ある者（もの）は知（ち）識（し）を

九 たくはふ 愚（おろ）かなる者（もの）の口（くち）はいまにも滅（ほろ）ぶをきたらす 富（と）者（もの）の資（た）財（から）はその堅（か）き城（しろ）なり 貧（ま）者（もの）のともしきはその

一〇 ほろびなり 義（た）義（ぎ）者（もの）の動（は）たらは生（いのち）命（めい）にいたり 惡（あ）者（もの）の利（り）得（とく）は罪（つみ）にいたる 教（おし）をまもる者（もの）は生（いのち）命（めい）の道（みち）にあり 懲（こ）戒（かい）

一一 をすつる者（もの）はあやまりにおちいる 怨（うら）みをかくす者（もの）には虚（いつはり）偽（ご）のくちびるあり 誹（そ）謗（り）をいたす者（もの）は愚（おろ）かなる者（もの）なり

一二 言（こと）おほければ罪（つみ）なきことあたはずその口（くち）唇（びる）を禁（とど）むるものは智（ち）慧（えい）あり 義（た）義（ぎ）者（もの）の舌（した）は精（せい）銀（ぎん）のごとし 惡（あ）者（もの）

一三 の心（こゝろ）は價（あ）すくなし 義（た）義（ぎ）者（もの）の口（くち）唇（びる）はおほくの人（ひと）をやしなひ 愚（おろ）かなる者（もの）は智（ち）慧（えい）なきに由（よ）り死（し）ぬ エホバ（エホバ）の祝（め）福（ふく）は

ウ王上二二・一一一五 オ太五・七、二五・三四 ケ羅二・八、九 ア伯二九・二三 キ伯三一・二四 詩 九二・二二一四 シ耶二五・二九 彼前 一一・七
一五・二二、二四 ク何一〇・二二 加六 フ詩一一・二、九 サ帖七・二〇 可一〇・ 五二・七 耶一七・八 四・二七、一八 七二四・三〇
六、九 雅三・一八 コ哥後九・六一一〇 一五、一六、九・ 二四 路二二・二二 傳五・一六 工錄八・三五 七二四・三〇
十錄一六・五 一五、一六、一〇・ 提前六・二七 ミ但一二・三 哥前九 工錄一〇・二五 七二四・三〇
ノ錄三一・三〇 マ詩一一・二、二 一、五七、六 二、五七、六 二、九 雅五・二〇 七二四・三〇 哥前 七二四・三〇

一四 隠す はかりごとなければ民たふれ 議士多ければ平安なり 他人のために保證をなす者は苦難をうけ 保證

一六 嫌ふ者は平安なり 柔順なる婦は榮譽をえ 強き男子は資財を得 慈悲ある者は己の靈魂に益をくはへ

一八 残忍者はおのれの身を擾はす 悪者の獲る報はむなく 義を播くもの得る報賞は確し 堅く義をたもつ

二〇 者は生命にいたり 悪を追もとむる者はおのれの死をまねく 心の戻れる者はエホバに憎まれ 直く道を歩む者

二二 彼は悦ばる 手に手をあはするとも悪人は罪をまぬかれず 義人の苗裔は救を得 美しき婦のつゝしみ

二三 なきは金の環の冢の鼻にあるが如し 義人のねがふところは凡て福祉にいたり 悪人のぞむところは震怒

二四 にいたる ほどこし散して反りて増ものあり 與ふべきを吝みてかへりて貧しきにいたる者あり 施與を好む

二六 ものは肥え 人を潤ほす者はまた利潤をうく 穀物を藏めて糶ざる者は民に詛はる 然れど售る者の首には祝福

二七 あり 善をもとむる者は恩恵をえん 悪をもとむる者には悪き事きたらん おのれの富を恃むものは仆れん

二九 されど義者は樹の青葉のごとくさかえん おのれの家をくるしむるものは風をえて所有とせん 愚なる者は

三〇 心の智きものの僕とならん 義人の果は生命の樹なり 智慧ある者は人を捕ふ みよ義人すらも世に

ありて報をうくべし 況て悪人と罪人とをや

第二二章

一 訓誨を愛する者は知識を愛す 懲戒を惡むものは畜のごとし 善人はエホバの恩寵をうけ 惡き
二 謀略を設くる人はエホバに罰せらる 人は惡をもて堅く立ことあたはず 義人の根は動くこと

なし 賢き婦はその夫の冠弁なり 辱をきたらす婦は夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ 義者の

六 おもひは直し 悪者の計るところは虚偽なり 悪者の言は人の血を流さんとて伺ふ されど直者の口は人を救ふ

八七 なり 悪者はたふされて無ものとならん されど義 者の家は立べし 人はその聰明にしたがひて譽られ 心

二〇九 の悖れる者は藐めらる 卑賤してしもべある者は自らたかぶりて食に乏き者に愈る 義 者はその畜の生命

二 を顧みる されど悪者は残忍をもてその憐憫とす おのれの田地を耕すものは食にあく 放蕩なる人にしたがあふ

二二 者は智慧なし 悪者はあしき人の獲たる物をうらやみ 義 者の根は芽をいだす 悪者はくちびるの愆に

二四 よりて害に陥る されど義 者は患難の中よりまぬかれいでん 人はその口の徳によりて福祉に飽ん 人の手の

二五 行爲はその人の身にかへるべし 愚なる者はみづからその道を見て正しとす されど智慧ある者はすゝめを

二六 容る 愚なる者はたゞちに怒をあらはし 智きものは恥をつゝむ 眞實をいふものは正義を述べ いつはりの

二七 證 人は虚偽をいふ 妄りに言をいだし 剣をもて刺がごとくする者あり されど智慧ある者の舌は人をいやす

二八 眞理をいふ 口唇は何時までも存つ されど虚偽をいふ 舌はたゞ瞬息のあひだのみなり 悪事をはかる者の心

二九 には欺詐あり 和平を議る者には歡喜あり 義 者には何の禍害も來らず 悪者はわざはひをもて充さる

三〇 つはりの口唇はエホバに憎まれ 眞實をおこなふ者は彼に悦ばる 賢 人は知識をかくす されど愚なる者の

三一 こゝろは愚なる事を述べ 勤めはたらく者の手は人ををさむるにいたり 情 者は人に服ふるにいたる

三二 れひ人の心にあれば之を屈ます されど善言はこれを樂します 義 者はその友に道を示す されど悪者は自ら

三三 途にまよふ 情 者はおのれの獵獲たる物をも燔す 勉めはたらくことは人の貴とき寶なり 義しき道には

イ箴一・二一、一八 二母前二五・一七 七箴六・三二 七箴三・一〇、一一 夕詩五七・四、五九・ 二〇 默三三・一五 ラ賽五〇・四
 口箴一四・三 七箴一三・七 七箴一八・七 七箴三・七 路一八・ 七、六四・三 夕詩三三・一六、一五 夕詩三九・一、二四
 ハ詩三七・三六、三七 八申二五・四 又彼後二・九 一 夕詩五二・五 箴一九 夕詩一〇・四 夕詩三九・一、二四
 箴二一・二一 太七 卜制三・一九 箴二八 九箴一三・二、一八・ 九 夕詩六・一七、一一 夕詩一五・一三 夕詩一〇・四
 二四一・二七 二九 二〇 夕詩六・一七、一一 夕詩一五・一三 夕詩一〇・四

三 人はへざる者はその子を憎むなり 子を愛する者はしきりに之をいましむ 義しき者は食をえて飽くされど
 悪者の腹は空し

第一四章

一 智慧ある婦はその家をたて 愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ 直くあゆむ者はエホバを
 畏れ 曲りてあゆむ者はこれを侮る 愚なる者の口にはその傲のために鞭笞あり 智者の口唇は
 おのれを守る 牛なければ飼養倉むなし 牛の力によりて生産る物おほし 忠信の證人はいつはらず 虚偽の
 あかしびとは 謙言を吐く 嘲笑者は智慧を求むれどもえず 哲者は知識を得ること容易し 汝おろかなる者
 の前を離れされ つひに知識の彼にあるを見ざるべし 賢者の智慧はおのれの道を曉るにあり 愚なる者の痴
 は欺くにあり おろかなる者は罪をかるんずされど 義者の中には恩恵あり 心の苦みは心みづから知る
 其よろこびには他人あづからず 悪者の家は亡され 正直き者の幕屋はさかゆ 人のみづから見えて正しとす
 る途にして その終はつひに死にいたる途となるものあり 笑ふ時にも心に悲あり 歡樂の終に憂あり 心の
 悖れる者はおのれの途に飽かん 善人もまた自己に飽かん 拙者はすべての言を信ず 賢者はその行を慎む
 智慧ある者は怖れて悪をはなれ 愚なる者はたかぶりて怖れず 怒り易き者は愚なることを行ひ 悪き謀計
 を設くる者は悪まる 拙者は愚なる事を得て所有となし 賢者は知識をもて冠弁となす 悪者は善者の前
 に俯伏し 罪ある者は義者の門に俯伏す 貧者はその鄰にさへも悪まる されど富者を愛する者はおほし
 二 其の鄰を藐むる者は罪あり 困苦者を憐むものは幸福あり 悪を謀る者は自己をあやまるにあらずや 善を
 謀る者には憐憫と眞實とあり すべての勤勞には利益あり されど口唇のことばは貧乏をきたらすのみなり

イ 詩三四・一〇、三七 八 傳四・一一 入 出二〇・一六、二三、ト 傳八・九、一七、二四 又 傳一六・二五 七 傳一・三二、三三、ヨ 傳一九・七
 二 伯一二・四 一 傳六・一九、二二 二 傳一〇・二三 三 傳六・二二 四 傳一・三二、三三、ヨ 傳一九・七
 三 伯一二・六 六 傳二二・六 一 傳二七、一四、二五 二 傳八・二五 三 傳二・二 四 傳二二・三 五 傳二二・三 六 傳二二・三 七 傳二二・三 八 傳二二・三 九 傳二二・三
 十 傳二二・三 十一 傳二二・三 十二 傳二二・三 十三 傳二二・三 十四 傳二二・三 十五 傳二二・三 十六 傳二二・三 十七 傳二二・三 十八 傳二二・三 十九 傳二二・三 二十 傳二二・三
 二十一 傳二二・三 二十二 傳二二・三 二十三 傳二二・三 二十四 傳二二・三 二十五 傳二二・三 二十六 傳二二・三 二十七 傳二二・三 二十八 傳二二・三 二十九 傳二二・三 三十 傳二二・三
 三十一 傳二二・三 三十二 傳二二・三 三十三 傳二二・三 三十四 傳二二・三 三十五 傳二二・三 三十六 傳二二・三 三十七 傳二二・三 三十八 傳二二・三 三十九 傳二二・三 四十 傳二二・三
 四十一 傳二二・三 四十二 傳二二・三 四十三 傳二二・三 四十四 傳二二・三 四十五 傳二二・三 四十六 傳二二・三 四十七 傳二二・三 四十八 傳二二・三 四十九 傳二二・三 五十 傳二二・三
 五十一 傳二二・三 五十二 傳二二・三 五十三 傳二二・三 五十四 傳二二・三 五十五 傳二二・三 五十六 傳二二・三 五十七 傳二二・三 五十八 傳二二・三 五十九 傳二二・三 六十 傳二二・三
 六十一 傳二二・三 六十二 傳二二・三 六十三 傳二二・三 六十四 傳二二・三 六十五 傳二二・三 六十六 傳二二・三 六十七 傳二二・三 六十八 傳二二・三 六十九 傳二二・三 七十 傳二二・三
 七十一 傳二二・三 七十二 傳二二・三 七十三 傳二二・三 七十四 傳二二・三 七十五 傳二二・三 七十六 傳二二・三 七十七 傳二二・三 七十八 傳二二・三 七十九 傳二二・三 八十 傳二二・三
 八十一 傳二二・三 八十二 傳二二・三 八十三 傳二二・三 八十四 傳二二・三 八十五 傳二二・三 八十六 傳二二・三 八十七 傳二二・三 八十八 傳二二・三 八十九 傳二二・三 九十 傳二二・三
 九十一 傳二二・三 九十二 傳二二・三 九十三 傳二二・三 九十四 傳二二・三 九十五 傳二二・三 九十六 傳二二・三 九十七 傳二二・三 九十八 傳二二・三 九十九 傳二二・三 一百 傳二二・三
 一百一 傳二二・三 一百二 傳二二・三 一百三 傳二二・三 一百四 傳二二・三 一百五 傳二二・三 一百六 傳二二・三 一百七 傳二二・三 一百八 傳二二・三 一百九 傳二二・三 二百 傳二二・三
 二百一 傳二二・三 二百二 傳二二・三 二百三 傳二二・三 二百四 傳二二・三 二百五 傳二二・三 二百六 傳二二・三 二百七 傳二二・三 二百八 傳二二・三 二百九 傳二二・三 三百 傳二二・三
 三百一 傳二二・三 三百二 傳二二・三 三百三 傳二二・三 三百四 傳二二・三 三百五 傳二二・三 三百六 傳二二・三 三百七 傳二二・三 三百八 傳二二・三 三百九 傳二二・三 四百 傳二二・三
 四百一 傳二二・三 四百二 傳二二・三 四百三 傳二二・三 四百四 傳二二・三 四百五 傳二二・三 四百六 傳二二・三 四百七 傳二二・三 四百八 傳二二・三 四百九 傳二二・三 五百 傳二二・三
 五百一 傳二二・三 五百二 傳二二・三 五百三 傳二二・三 五百四 傳二二・三 五百五 傳二二・三 五百六 傳二二・三 五百七 傳二二・三 五百八 傳二二・三 五百九 傳二二・三 六百 傳二二・三
 六百一 傳二二・三 六百二 傳二二・三 六百三 傳二二・三 六百四 傳二二・三 六百五 傳二二・三 六百六 傳二二・三 六百七 傳二二・三 六百八 傳二二・三 六百九 傳二二・三 七百 傳二二・三
 七百一 傳二二・三 七百二 傳二二・三 七百三 傳二二・三 七百四 傳二二・三 七百五 傳二二・三 七百六 傳二二・三 七百七 傳二二・三 七百八 傳二二・三 七百九 傳二二・三 八百 傳二二・三
 八百一 傳二二・三 八百二 傳二二・三 八百三 傳二二・三 八百四 傳二二・三 八百五 傳二二・三 八百六 傳二二・三 八百七 傳二二・三 八百八 傳二二・三 八百九 傳二二・三 九百 傳二二・三
 九百一 傳二二・三 九百二 傳二二・三 九百三 傳二二・三 九百四 傳二二・三 九百五 傳二二・三 九百六 傳二二・三 九百七 傳二二・三 九百八 傳二二・三 九百九 傳二二・三 一千 傳二二・三
 一千一 傳二二・三 一千二 傳二二・三 一千三 傳二二・三 一千四 傳二二・三 一千五 傳二二・三 一千六 傳二二・三 一千七 傳二二・三 一千八 傳二二・三 一千九 傳二二・三 二千 傳二二・三
 二千一 傳二二・三 二千二 傳二二・三 二千三 傳二二・三 二千四 傳二二・三 二千五 傳二二・三 二千六 傳二二・三 二千七 傳二二・三 二千八 傳二二・三 二千九 傳二二・三 三千 傳二二・三
 三千一 傳二二・三 三千二 傳二二・三 三千三 傳二二・三 三千四 傳二二・三 三千五 傳二二・三 三千六 傳二二・三 三千七 傳二二・三 三千八 傳二二・三 三千九 傳二二・三 四千 傳二二・三
 四千一 傳二二・三 四千二 傳二二・三 四千三 傳二二・三 四千四 傳二二・三 四千五 傳二二・三 四千六 傳二二・三 四千七 傳二二・三 四千八 傳二二・三 四千九 傳二二・三 五千 傳二二・三
 五千一 傳二二・三 五千二 傳二二・三 五千三 傳二二・三 五千四 傳二二・三 五千五 傳二二・三 五千六 傳二二・三 五千七 傳二二・三 五千八 傳二二・三 五千九 傳二二・三 六千 傳二二・三
 六千一 傳二二・三 六千二 傳二二・三 六千三 傳二二・三 六千四 傳二二・三 六千五 傳二二・三 六千六 傳二二・三 六千七 傳二二・三 六千八 傳二二・三 六千九 傳二二・三 七千 傳二二・三
 七千一 傳二二・三 七千二 傳二二・三 七千三 傳二二・三 七千四 傳二二・三 七千五 傳二二・三 七千六 傳二二・三 七千七 傳二二・三 七千八 傳二二・三 七千九 傳二二・三 八千 傳二二・三
 八千一 傳二二・三 八千二 傳二二・三 八千三 傳二二・三 八千四 傳二二・三 八千五 傳二二・三 八千六 傳二二・三 八千七 傳二二・三 八千八 傳二二・三 八千九 傳二二・三 九千 傳二二・三
 九千一 傳二二・三 九千二 傳二二・三 九千三 傳二二・三 九千四 傳二二・三 九千五 傳二二・三 九千六 傳二二・三 九千七 傳二二・三 九千八 傳二二・三 九千九 傳二二・三 一萬 傳二二・三
 一萬一 傳二二・三 一萬二 傳二二・三 一萬三 傳二二・三 一萬四 傳二二・三 一萬五 傳二二・三 一萬六 傳二二・三 一萬七 傳二二・三 一萬八 傳二二・三 一萬九 傳二二・三 二萬 傳二二・三
 二萬一 傳二二・三 二萬二 傳二二・三 二萬三 傳二二・三 二萬四 傳二二・三 二萬五 傳二二・三 二萬六 傳二二・三 二萬七 傳二二・三 二萬八 傳二二・三 二萬九 傳二二・三 三萬 傳二二・三
 三萬一 傳二二・三 三萬二 傳二二・三 三萬三 傳二二・三 三萬四 傳二二・三 三萬五 傳二二・三 三萬六 傳二二・三 三萬七 傳二二・三 三萬八 傳二二・三 三萬九 傳二二・三 四萬 傳二二・三
 四萬一 傳二二・三 四萬二 傳二二・三 四萬三 傳二二・三 四萬四 傳二二・三 四萬五 傳二二・三 四萬六 傳二二・三 四萬七 傳二二・三 四萬八 傳二二・三 四萬九 傳二二・三 五萬 傳二二・三
 五萬一 傳二二・三 五萬二 傳二二・三 五萬三 傳二二・三 五萬四 傳二二・三 五萬五 傳二二・三 五萬六 傳二二・三 五萬七 傳二二・三 五萬八 傳二二・三 五萬九 傳二二・三 六萬 傳二二・三
 六萬一 傳二二・三 六萬二 傳二二・三 六萬三 傳二二・三 六萬四 傳二二・三 六萬五 傳二二・三 六萬六 傳二二・三 六萬七 傳二二・三 六萬八 傳二二・三 六萬九 傳二二・三 七萬 傳二二・三
 七萬一 傳二二・三 七萬二 傳二二・三 七萬三 傳二二・三 七萬四 傳二二・三 七萬五 傳二二・三 七萬六 傳二二・三 七萬七 傳二二・三 七萬八 傳二二・三 七萬九 傳二二・三 八萬 傳二二・三
 八萬一 傳二二・三 八萬二 傳二二・三 八萬三 傳二二・三 八萬四 傳二二・三 八萬五 傳二二・三 八萬六 傳二二・三 八萬七 傳二二・三 八萬八 傳二二・三 八萬九 傳二二・三 九萬 傳二二・三
 九萬一 傳二二・三 九萬二 傳二二・三 九萬三 傳二二・三 九萬四 傳二二・三 九萬五 傳二二・三 九萬六 傳二二・三 九萬七 傳二二・三 九萬八 傳二二・三 九萬九 傳二二・三 十萬 傳二二・三

・二九 二二二・二二 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八
・二九 二二二・二〇 半二二・二六、二九 上二二・二三、一四、 三三・一九 來四・ 九 賽一・二一、 王上二二・八

二四 智慧ある者の財寶はその冠弁となる 愚なる者のおろかにはたゞ痴なり 眞實の證人は人のいのちを救ふ 謊言
を吐く者は偽人なり エホバを畏るゝことは堅き依頼なり その兒輩は逃避場をうべし エホバを畏るゝこと
とは生命の泉なり 人を死の罟より脱れしむ 王の榮は民の多きにあり 牧伯の衰敗は民を失ふにあり 怒を
遅くする者は大なる知識あり 氣の短き者は愚なることを顯す 心の安穩なるは身のいのちなり 娼妓は骨の腐
なり 貧者を虐ぐる者はその造主を侮るなり 彼をうやまふ者は貧者をあはれむ 悪者はその惡のうち
にて亡され 義者はその死ぬる時にも望あり 智慧は哲者の心にとゞまり 愚なる者の衷にある事はあらはる
義は國を高くし 罪は民を辱しむ さとき僕は王の恩を蒙る 辱をきたらす者はその震怒にあふ

第一五章

一 柔和なる答は憤恨をとどめ 厲しき言は怒を激す 智慧ある者の舌は知識を善きものと
おもはしめ 愚なる者の口はおろかをはく エホバの目は何處にもありて 悪人と善人とを鑒みる
四 溫柔き舌は生命の樹なり 悖れる舌は靈魂を傷ましむ 愚なる者はその父の訓をかるんず 誠命をまもる者は
賢者なり 義者の家には多くの資財あり 悪者の利潤には擾累あり 智者のくちびるは知識をひろむ 愚
なる者の心は定りなし 悪者の祭物はエホバに憎まれ 直き人の祈は彼に悦ばる 悪者の道はエホバに憎まれ
正義をもとむる者は彼に愛せらる 道をはなるゝ者には厳しき懲治あり 譴責を惡む者は死ぬべし 陰府と
沉淪とはエホバの目の前にあり 況て人の心をや 嘲笑者は誠めらるゝことを好まず また智慧ある者に近づ
かず 心に喜樂あれば顔色よろこばし 心に憂苦あれば氣ふさぐ 哲者のこゝろは知識をたづね 愚なる者の

ネ得一・二六 箴一八 ウ箴一〇・一、一七、才出二三・八 一九・二三
二四、一九・一三、ク箴一四・六、傳二・マ箴一七・一五、一八
ナ箴六・二、一一・一五、牛箴一二・二五、一五、一四、八・一、五
ラ箴一六・一八、一三、一五、ヤ箴一〇・一、一五、ケ雅一・二九
ム箴三・八、ノ詩二三・一五、二〇、一七・二二、フ伯一三・五
ヨ箴一〇・一、二〇、箴二四・二三、二八、サ箴一二・一八、二六
五、エ詩七八・二、ア箴一〇・一四、一二、キ箴二八・二四、
ヲ利一九・一五、申一、一三、一三・三、傳、ユ母後二三・三、五一
一〇・二二、一六・一九、一〇・二二、詩一八・二、二七、
一、六一・三、四、九一・二、二四・二、
×箴一〇・一五

七 心なし何ぞ智慧をかはんとて手にその價の金をもつや 朋友はいづれの時にも愛す 兄弟は危難の時のために

生る 智慧なき人は手を拍てその友の前にて保證をなす 争端をこのむ者は罪を好みその門を高くする者は

敗壞を求む 邪曲なる心ある者はさいはひを得ずその舌をみだりにする者はわざはひに陥る 愚なる者を

産むものは自己の憂を生じ 愚なる者の父は喜樂を得ず 心のたのしみは良藥なり 靈魂のうれひは骨を枯す

悪者は人の懐より賄賂をうけて審判の道をまぐ 智慧は哲者の面のまへにありされど愚なる者は目を地

の極にそぐ 愚なる子は其父の憂となり亦これを生る母の煩勞となる 義者を罰するは善ならず 貴き者

をその義きがために扑は善らず 言を寡くする者は知識あり心の靜なる者は哲人なり 愚なる者も黙する

ときは智慧ある者と思はれその口唇を閉るときは哲者とおもはるべし

第一八章

一 自己を人と異にする者はおのれの欲するところのみを求めてすべての善き考察にもとる 愚な

る者は明哲を喜ばず 惟おのれの心意を顯すことを喜ぶ 悪者きたれば藐視したがひてきたり 恥

きたれば凌辱もともに来る 人の口の言は深水の如し湧てながる川 智慧の泉なり 悪者を偏視るは善

らず 審判をなして義者を悪しとするも亦善ならず 愚なる者の口唇はあらそひを起しその口は打ること

招く 愚なる者の口はおのれの敗壞となりその口唇はおのれの靈魂の罟となる 人の是非をいふもの言は

たはぶれのごとしといへども反つて腹の奥にいる 其の行爲をおこたる者は滅すものの兄弟なり エホバの

名はかたき槽のごとし 義者は之に走りいりて救を得 富者の資財はその堅き城なりこれを高き石垣の如く

四 すべて愚なる者は怒り争ふ 情者は寒ければとて耕さず この故に收穫のときにおよびて求るとも得るところ
 六五 なし 人の心にある謀計は深き井の水のごとし 然れど哲人はこれを汲出す 凡そ人は各自おのれの善を誇
 八七 るされど誰か忠信なる者に遇しぞ 身を正しくして步履む義 人はその後の子孫に福祉あるべし 審判の位
 九 に坐する王はその目をもてすべての悪を散す たれか我わが心をきよめ わが罪を潔められたりといひ得るや
 二〇 二種の權衡二種の斗量は等しくエホバに憎まる 幼子といへどもその動作によりておのれの根性の清きか
 二二 或は正しきかをあらはす 聴くところの耳と視るところの眼とはともにエホバの造り給へるものなり なん
 二四 ぢ睡眠を愛すること勿れ 恐くは貧窮にいたらん 汝の眼をひらけ 然らば糧に飽べし 買者はいふ悪し悪しと
 二五 然れど去りて後はみづから誇る 金もあり眞珠も多くあれど貴き器は知識のくちびるなり 人の保證を
 二七 なす者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をばかたくとらへよ 欺きとりし糧は人に甜しされど後に
 二八 はその口に沙を充されん 謀計は相議るによりて成る 戦はんとせば先よく議るべし あるきめぐりて人の
 三〇 是非をいふ者は密事をもらす 口唇をひらきてあるくものと交ること勿れ おのれの父母を罵るものはその
 三二 燈火くらやみの中に消ゆべし 初に俄に得たる産業はその終さいはひならず われ悪に報いんと言ふこと勿
 三三 れ エホバを待て 彼なんぢを救はん 二種の砒碼はエホバに憎まる 虚偽の權衡は善らず 人の步履はエホ
 三四 バによる 人いかで自らその道を明かにせんや 漫に誓願をたつることは其人の害となる 誓願をたてよのちに
 三六 考ふること亦然り 賢き王は箕をもて簸るごとく悪人を散し 車輪をもて碾すごとく之を罰す 人の靈魂
 三七

イ箴一〇・四、一九、ホ詩二二・一 路一八リ王上八・四六 代下 一一・二、二〇・二三 二七・二三 利 申三三・三五
 二四 八 六・三六 伯一四・四 米六・一〇、一一 羅二二・一一 夕箴九・一七 二〇・九 太一五・四 一七・二三、二四
 口箴一九・一五 へ哥後一・一二 詩五一・五 傳七・ル太七・一六 力伯二八・一二、一六 一八九 箴三・一五、 二四・二〇 二九 箴一・二七、
 八箴一八・四 ト詩三七・二六、 二〇 哥前四・四 ヲ出四・一一 詩九四 八・一一 一八九 箴三・一五、 二四・二〇 二九 箴一・二七、
 二箴二五・一四 太六 一一二・二二 約壹一・八 九 八・一一 一八九 箴三・一五、 二四・二〇 二九 箴一・二七、
 ・二 路一八・一一 チ箴二〇・二六 又申二五・一三 箴 七箴六・九、一一、 日箴三三・二六、二七、 ツ箴一一・一三 ム哈二・六 申後一六・一二

ノ鏡三〇・一〇 二〇・八
オ詩三七・二三 鏡一 マ哥前二・二一
六・九耶一〇・二三
ク傳五・四、五
十詩一〇一・五 鏡
ケ詩一〇一・一 鏡 一六・一五
二九・一四
フ鏡二六・三二
コ鏡二六・二二
エ鏡二四・一二 路 六・六 米六・七、八
一六、一五
ヲ傳前二五・二三 詩 一六、一七
五〇・八 鏡一五・
八 卷一・一一 何 一一、二〇、二二
六・六 米六・七、八 彼後二・三
ア鏡六・一七
サ鏡一〇・四、一三、四
キ鏡一〇・二、一三、
一一、二〇、二二
メ鏡四・五
ミ鏡一九・二五
ユ鏡一九・二三、二一
・二九、二五、二四、
二七・一五
シ太七・二、一八、三〇
モ鏡一一・八 卷四三
雅二・二三
エ鏡一七・八、二三、
七鏡三一・九
一八・二六
と鏡一〇・二九

二八 はエホバの燈火にして人の心の奥を窺ふ 王は仁慈と眞實をもて自らたもつ その位もまた恩惠のおこなひに
よりて堅くなる 少者の榮はその力 おいたる者の美しきは白髪なり 傷つくまでに打たば悪きところきよ
まり 打てる鞭は腹の底までもとほる

第二章

一 王の心はエホバの手の中にありて恰かも水の流のごとし 彼その聖旨のまゝに之を導きたまふ

二 人の道はおのれの目に正しとみゆされどエホバは人の心をはかりたまふ 正義と公平を行ふ

三 は犠牲よりも愈りてエホバに悦ばる 高ぶる目と驕る心とは悪人の光にしてたゞ罪のみ 勤めはたらく者の

四 圖るところは遂にその身を豊裕ならしめ 凡てさわがしく急ぐ者は貧乏をいたす 虚偽の舌をもて財を得るは

五 吹はらはるゝ雲烟のごとし 之を求むる者は死を求むるなり 悪者の殘虐は自己を亡す これ義しきを行ふこと

六 を好まざればなり 罪人の道は曲り 潔者の行爲は直し 相争ふ婦と偕に室に居らんよりは屋蓋の隅にをる

七 はよし 悪者の靈魂は悪をねがふ その鄰も彼にあはれみ見られず あざけるもの罰をうくれば拙 者は

八 智慧を得 ちるあるもの教をうくれば知識を得 義しき神は悪者の家を見とめて悪者を滅亡に投入れたまふ

九 耳を掩ひて貧者の呼ぶ聲をきかざる者は おのれ自ら呼ぶときもまた聽れざるべし 潜なる饋物は忿恨を

一〇 だため 懐中の賄賂は烈しき瞋恚をやはらぐ 公義を行ふことは義 者の喜樂にして 悪を行ふものの敗壞なり

一一 さとりの道を離るゝ人は死し者の集會の中にをらん 宴樂を好むものは貧 人となり 酒と膏とを好むもの

一二 は富をいたさじ 悪者は義 者のあがなひとなり 悖れる者は直き者に代る 争ひ怒る婦と偕にをらんより

二〇 は荒野に居るはよし 智慧ある者の家には貴き寶と膏とあり 愚なる人は之を吞つくす 正義と憐憫とを

三三 追求むる者は生命と正義と尊貴とを得べし 智慧ある者は強者の城にのほりてその堅く頼むところを倒す

二四 口と舌とを守る者はその靈魂を守りて患難に遇せじ 高ぶり驕る者を嘲笑者となづくこれ驕者を逞しくし

二六 行ふものなり 情者の情慾はおのれの身を殺す是はその手を肯て働かせざればなり 人は終日しきり

二七 に慾を圖るされど義者は與へて吝ます 悪者の獻物は憎まる 況て悪き事のために獻ぐる者をや 虚偽

二九 の證人は滅さる然れど聽く人は恒にいふべし 悪人はその面を厚くし 義者はその道を謹む エホバに

三二 むかひては智慧も明哲も謀略もなすところなし 戦鬪の日のために馬を備ふされど勝利はエホバによる

第二二章

嘉名は大なる富にまさり 恩寵は銀また金よりも佳し 富者と貧者と偕に世に在る 凡て之を造りし者はエホバなり 賢者は災禍を見てみづから避け 拙者はすゝみて罰をうく 謙遜

五 とエホバを畏るゝ事との報は富と尊貴と生命となり 悖れる者の途には荆棘と罟とあり 靈魂を守る者は遠く

七六 これを離れん 子をその道に従ひて教へよ 然ばその老たる時も之を離れじ 富者は貧者を治め 借者は

九八 貸人の僕となる 悪を播くものは禍害を穡りその怒の杖は廢るべし 人を見て恵む者はまた恵まる 此は

二〇 その糧を貧者に與ふればなり 嘲笑者を逐へば争論も亦さり 且鬭諍も恥辱もやむ 心の潔きを愛する者は

二二 その口唇に憐憫をもてり 王その友とならん エホバの目は知識ある者を守る 彼は悖れる者の言を敗りたまふ

二三 情者はいふ獅そとにあり われ衝にて殺されんと 妓婦の口は深き坑なり エホバに憎まるゝ者これに陥

イ詩一一二・三 太 雅三・二
 二五・三四 水箴一三・四 六・二〇 慶五・二二 ル詩三・八
 口箴一五・九 太五・六 へ詩三七・二六、一一 一 七 箴二九・一三 哥前 夕詩一一二・三 太六 雅二・六
 八傳九・一四 二・九 二二・二 雅五・三九 一三・二二 一四・三三 一五・一五 箴 一・三三 一・一〇
 二箴一二・一三、一三 卜詩五〇・九 箴一五 又詩二〇・七、三三、 九 一七 箴三二・一 一四・三一 一四・三一
 三、一八・二二 八 箴六六・三 耶 一七 箴三一・一 一四・三一 一四・三一 一四・三一 一四・三一
 六・二〇 慶五・二二 ル詩三・八 三 箴一四・一六、二七 ツ弗六・四 提後三・ 一〇 創二二・九、一〇 詩
 二五・三四 水箴一三・四 六・二〇 慶五・二二 ル詩三・八 三 箴一四・一六、二七 ツ弗六・四 提後三・ 一〇 創二二・九、一〇 詩
 口箴一五・九 太五・六 へ詩三七・二六、一一 一 七 箴二九・一三 哥前 夕詩一一二・三 太六 雅二・六
 八傳九・一四 二・九 二二・二 雅五・三九 一三・二二 一四・三三 一五・一五 箴 一・三三 一・一〇
 二箴一二・一三、一三 卜詩五〇・九 箴一五 又詩二〇・七、三三、 九 一七 箴三二・一 一四・三一 一四・三一 一四・三一
 三、一八・二二 八 箴六六・三 耶 一七 箴三一・一 一四・三一 一四・三一 一四・三一 一四・三一

いへどもその心は汝に眞實ならず 汝つひにその食へる物を吐出すにいたり 且その出しと懇懃の言もむなしく

ならん 愚なる者の耳に語ることを勿れ 彼なんぢが言の示す明哲を藐めん 古き地界を移すことなかれ 孤子

の畑を侵すことなかれ 汝はかれが贖者は強し 必ず汝に對らひて之が訴をのべん 汝の心を教に用ゐる 汝の

耳を知識の言に傾けよ 子を懲すことを爲さるなかれ 鞭をもて彼を打とも死することあらじ もし鞭をもて

彼をうたばその靈魂を陰府より救ふことをえん わが子よもし汝のこゝろ智からば我が心もまた歡び もし

汝の口唇たゞしき事をいはじ 我が腎腸も喜ぶべし なんぢ心に罪人をうらやむ勿れ たゞ終日エホバを畏れ

よ そは必ず應報ありて汝の望は廢らざればなり わが子よ 汝きよて智慧をえ かつ汝の心を道にかたぶけ

よ 酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ それ酒にふける者と肉を嗜む者とは貧しくなり 睡眠を貪る

者は敝れたる衣をきるにいたらん 汝を生る父にきけ 汝の老たる母を輕んずる勿れ 眞理を買へ これを

售るなかれ 智慧と誠命と知識とまた然あれ 義き者の父は大によろこび 智慧ある子を生る者はこれがために

楽しまん 汝の父母を楽しませ 汝を生る者を喜ばせよ わが子よ 汝の心を我にあたへ 汝の目にわが途を樂

しめ それ妓婦は深き坑のごとく 淫婦は狭き井のごとし 彼は盜賊のごとく人を窺ひ かつ世の人の中に悖れ

る者を増なり 禍害ある者は誰ぞ 憂愁ある者は誰ぞ 争端をなす者は誰ぞ 煩慮ある者は誰ぞ 故なくして傷を

うる者は誰ぞ 赤目ある者は誰ぞ 是すなはち酒に夜をふかすもの 往て混和せたる酒を味ふる者なり 酒

はあかく盃の中に泡だち滑かにくだる 汝これを見るなかれ 是は終に蛇のごとく噬み 蝮の如く刺すべし

イ箴九・八 太七・六 二箴一三・二四、一九・ 二九・三 二四・一四 路一六 羅一三・一三 弗五 力箴四・五、七 太二三 箴七・一二 傳七・ 一八 一八
口申一九・一四、二七・ 一八、二二、一五、 ト詩三七・一七、三三 二二五 二六
一七 箴三三・二八 二九・一五、一七 箴三三・二一、二四、一 又箴四・二三 箴一九・一五 三箴一〇・一、一五、 二六
八伯三一・二二 箴 ホ哥前五・五 箴二八・一四 ル賽五・二二 太二四 一箴一八、三〇・一七 二〇、二三・一五、 二六
二二・二三 箴 へ箴二三・二四、二五、 リ詩三七・三七 箴 四九路二一・三四 弗六・一、二 夕箴二二・一四 二六
ナ詩七五・八 箴九・二 弗五

ラ 二七・三二	耶五	鐵三・三二、二三	ヤ 鐵一・一四、一五	フ 詩八二・四	賽五八	一九 羅二・六	歌	キ 詩一〇・九、一〇	・二二			
・三三		一七、二四・一九	二二、二〇・一八	・六、七	約 壹三	二・二三、二三・二二	エ 伯五・一九	詩三四	・伯三一・二九	詩三	エ 詩一一・六	
ム 弗四・一九		ノ 鐵一・一五	路一四・三一	一六		テ 歌五・一	一九、三七・二四	五・一五、一九	鐵	・伯一八・五、六、二二	・二七	鐵一三・九
ウ 申二九・一九	賽	オ 詩一〇・七	マ 詩一〇・五	鐵一四	コ 鐵三二・二	ア 詩一九・一〇、一一	米七・八	一七・五	阿二二	・二七	鐵一三・九	二〇・二〇
五六・二二		ク 鐵二二・二二	傳九	・六	エ 伯三四・一一	詩六	九・一〇・三	メ 帖七・一〇	廢五	シ 詩三七・一、七三・三		二〇・二〇
半 詩三七・一、七三・三		・二六	ケ 羅一・三〇	二・二二	耶 三三	サ 鐵三三・二八	二・八・二四	歌一八	鐵二三・一七、二四			

また汝の目は怪しきものを見なんぢの心は謊言をいはん 汝は海のなかに偃すもののごとく 帆桅の上に偃すもののごとし 汝いはん人われを撃ども我いたます 我を擧げども我おほえす 我さめなばまた酒を求めんと

第二十四章

はかりその口唇に人を害ふことをいへばなり 家は智慧によりて建られ 明智によりて堅くせられ

また室は知識によりて各種の貴く美しき寶にて充されん 智慧ある者は強し 知識ある人は力をます

汝よき謀計をもて戦闘をなせ 勝利は議者の多きによる 智慧は高くして愚なる者の及ぶところにあらず

愚なる者は門にて口を啓くことをえず 悪をなさんと謀る者を邪曲なる者と稱ふ 愚なる者の謀るところは

罪なり 嘲笑者は人に憎まる 汝もし患難の日に氣を挫かば汝の力は弱し なんぢ死地に曳れゆく者を拯へ

滅亡によろめきゆく者をすくはざる勿れ 汝われら之を知らずといふとも心をはかる者これを曉らざらんや

汝の靈魂をまもる者これを知ららんや 彼はおのおのの行爲によりて人に報ゆべし わが子よ蜜を食へ 是は美

ものなり また蜂のすの滴瀝を食へ 是はなんぢの口に甘し 智慧の汝の靈魂におけるも是の如しと知れこれ

を得ばかならず報いありて汝の望すたれし 悪者よ義者の家を窺ふことなかれ その安居所を攻ること勿れ

そは義者は七次たふるゝともまた起くされど悪者は禍災によりて亡ぶ 汝の仇たふるゝとき樂しむこと

勿れ彼の亡ぶるときこゝろに喜ぶことなかれ 恐くはエホバこれを見て悪しとしその震怒を彼より離れしめ

たまはん なんぢ悪者を怒ることなかれ 邪曲なる者を羨むなかれ それ悪者には後の善賚なし 邪曲なる

者の燈火は滅されん 二一 わが子よエホバと王とを畏れよ 叛逆者に交ること勿れ 三三 斯るものらの災禍は速に

おこるこの兩者の滅亡はたれか知えんや 三三 是等もまた智慧ある者の箴言なり 偏りて鞫するは

善らず 罪人に告て汝は義しといふものをば衆人これを詛ひ諸民これを悪まん 二五 これを譴る者は恩をえん

また福祉これにきたるべし 二六 ほどよき應答をなす者は口唇に接吻するなり 外にて汝の工をととのへ田圃に

てこれを自己のためにそなへ 然るのち汝の家を建よ 二八 故なく汝の鄰に敵して證することなかれ 汝なんぞ口唇

をもて欺くべけんや 二九 彼の我に爲し、如く我も亦かれになすべし われ人の爲ししところに循ひてこれに報い

んといふこと勿れ 三〇 われ曾て情 人の田圃と智慧なき人の葡萄園とをすぎて見しに 三二 荆棘あまねく生え 薊

その地面を掩ひその石垣くづれるたり 三三 我これをみて心をとどめこれを觀て教をえたり 三三 しばらく臥し

暫らく睡り手を又きて又しばらく休む 三四 さらば汝の貧窮は盜人のごとく汝の缺乏は兵士の如くきたるべし

第二十五章

此等もまたソロモンの箴言なり ユダの王ヒゼキヤに屬せる人々これを輯めたり 二二 事を隠すは神の榮譽なり 事を窮むるは王の榮譽なり 三三 天の高さと地の深さと 王たる者の心とは測るべ

からず 銀より渣滓を除け さらば銀工の用ふべき器いでん 五 王の前より悪者をのぞけ 然ばその位義により

て堅く立ん 王の前に自ら高ぶることなかれ 貴 人の場に立つことなかれ 七 なんぢが目に見る王の前にて

下にさげらるゝよりはこゝに上れといはるゝこと愈れり 八 汝かるがるしく出でて争ふことなかれ 恐くは終に

いたりて汝の鄰に辱しめられん その時なんぢ如何になさんとするか 九 なんぢ鄰と争ふことあらば只これと争へ

イ羅二三・七 彼前

一約七・二四

ホ弗四・二五

チ箴六・九

ヲ提前二・二一

夕箴一七・一四 太五・

二五

五〇・四

ソ箴一五・二三 泰

ラ創三三・四 俣前

二・二七

ハ箴一七・一五 賽五

ハ箴二〇・二二 太五

リ王上四・三二

ワ箴二〇・八

カ箴二六・二二、二九

レ太五・二五、一八・

一五

ネ箴二〇・六

ナ箴一一

二七、一六・一九

二王上五・一七、一八

二七、一九

ト創三・一八

ル伯二九・一六

ヨ路一四・八一〇

ソ箴一五・二三

泰

ラ創三三・四

俣前

二五・二四 箴一五 ウ詩五七・四、二二〇。 才後一六・二二 一〇 九一九・三、二一 一 九二七・二二
一、一六・一四 三、四 箴二二・一八 ノ出三三・四、五 太五 九、一九 一〇 九一六・三三 一 五
ム箴三五・二七 半但六・一八 箴二二 四四 箴二二・二〇 十詩一〇一・五 一 九二五・二六 一 九二七・二七 一 九二九・二七 一 九三〇・二七
一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七 一 九三三・二七

二〇 人の密事を洩すなかれ 恐くは聞者なんぢを卑しめん 汝そしられて止ざらん 機にかなひて語る言は銀の

彫刻物に金の林檎を嵌たるが如し 智慧をもて謹むる者の之をきく者の耳におけることは金の耳環と精金の

飾のごとし 忠信なる使者は之を遣す者におけること穢收の日に冷かなる雪あるがごとし能その主の心を喜

ばしむ おくりものすと偽りて誇る人は雨なき雲風の如し 怒を緩くすれば君も言を容る 柔かなる舌は骨

を折く なんぢ蜜を得るか 惟これを足る程に食へ 恐くは食ひ過して之を吐出さん なんぢの足を鄰の家に

しげくするなかれ 恐くは彼なんぢを厭ひ悪まん その鄰に敵して虚偽の證をたつる人は斧刃または利き箭の

ごとし 艱難に遇ふとき忠實ならぬ者を頼むは悪しき齒または跛たる足を恃むがごとし 心の傷める人の

前に歌をうたふは 寒き日に衣をぬぐが如く 曹達のうへに酢を注ぐが如し なんぢの仇もし飢ゑなば之に糧を

くらはせもし渴かば之に水を飲ませよ なんぢ斯するは火をこれが首に積むなり エホバなんぢに報いたまふ

べし 北風は雨をおこし かげごとをいふ舌は人の顔をいからす 争ふ婦と偕に室に居らんより屋蓋の隅に

をるは宜し 遠き國よりきたる好き消息は 渴きたる人における冷かなる水のごとし 義者の悪者の前に

服するは井の濁れるがごとく 泉の汚れたるがごとし 蜜をおほく食ふは善らず 人おのれの榮譽をもとむる

は榮譽にあらず おのれの心を制へざる人は石垣なき壊れたる城のごとし

第二十六章 榮譽の愚なる者に適はざるは 夏の時に雪ふり 穢收の時に雨ふるがごとし 故なき詛は雀の翔

のために杖あり 愚なる者の痴にしたがひて答ふること勿れ 恐くはおのれも是と同じからん 愚なる者の

六 痴にしたがひて之に答へよ 恐くは彼おのれの目に自らを智者と見ん 愚なる者に托して事を言おくる者は

八七 おのれの足をきり身に害をうく 跛者の足は用なし 愚なる者の口の箴もかくのごとし 榮譽を愚なる者

九 に與ふるは 石を投石索に繋ぐが如し 愚なる者の口にたもつ箴言は 醉へるものの刺ある杖を手にて擧ぐるが

二〇 ごとし 愚なる者を備ひ流浪者を備ふ者は すべての人を傷くる射手の如し 狗のかへり來りてその吐たる

二二 物を食ふがごとく 愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ 汝おのれの目に自らを智慧ある者とする人を

二四 見るか 彼よりも却て愚なる人に望あり 情者は途に獅あり 衝に獅ありといふ 戸の蝶鉸によりて轉るご

二六 とく 情者はその牀に輾轉す 情者はその手を盤にいるも之をその口に擧ることを厭ふ 情者はおのれ

二七 の目に自らを善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす 路をよぎり自己に關りなき争擾にたづさはる者は

二八 狗の耳をとらふる者のごとし 既にその鄰を欺くことをなして我はたゞ戯れしのみといふ者は 火箭または鎗

二〇 または死を擲つ 狂人のごとし 薪なければ火はきえ 人の是非をいふ者なければ争端はやむ 煨火に炭を

二三 つぎ火に薪をくぶるがごとく 争論を好む人は争論を起す 人の是非をいふものの言はたはぶれのごとしと雖も

二四 かへつて腹の奥に入る 温かき口唇をもちて悪き心あるは 銀の滓をきせたる瓦片のごとし 恨むる者は口唇

二五 をもて自ら飾れども 心の衷には虚偽をいなく 彼その聲を和らかにすると之を信するなかれ その心に七の

二六 憎むべき者あればなり たとひ虚偽をもてその恨をかくすとも その悪は會集の中に顯はる 坑を掘るものは

二八 自ら之に陥らん 石を轉ばしあぐる者の上にはその石まるびかへらん 虚偽の舌はおのれの害す者を憎み 諂ふ

口は滅亡をきたらす

イ彼後三・二二 一八・一一 羅二二 水鏡一九・二四 七鏡二五・一八、二九 又詩二八・三耶九・八 五七・六 箴二八・
口出八・一五 一六 默三・一七 へ弗五・四 二二 二 九・一五、一〇・二、
へ鏡二九・二〇 路 二鏡三三・二三 ト鏡三三・一〇 一鏡二八・八 一〇 傳一〇・八

一 路一・一九、二〇 カ約三・二二 夕詩一四一・五 二四 二四 二〇・一六 二 才統一七・三
 二 路四・二三 三 路二八・二三 加二 路伯六・七 七 路一〇・一、二三 十 路三三・三三 五 路一九・一三 夕統三三・三五 第一
 三 路三五・二七 四 路一七・一七、一八 一五 路二四 路三三・二六 路 夕路九・七、一三 一 路一八、六・七 五 路五・三

第二十七章

一 なんぢ明日のことを誇るなかれ そは一日の生ずるところの如何なるを知らざればなり 汝おの
 れの口をもて自ら讚むることなく人をして己を讚めしめよ自己の口唇をもてせず他人をして己を
 ほめしめよ 石は重く沙は軽からず 然ど愚なる者の怒はこの二よりも重し 忿怒は猛く憤恨は烈しされ
 ど嫉妬の前には誰か立ことを得ん 明白に譴むるは秘に愛するに愈る 愛する者の傷つくるは眞實よりし
 敵の接吻するは偽詐よりするなり 飽るものは蜂の蜜をも踐つくされど飢たる者には苦き物さへもすべて甘し
 その家を離れてさまよふ人は その巢を離れてさまよふ鳥のごとし 膏と香とは人の心をよるこばすなり
 心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のごとし なんぢの友と汝の父の友とを棄るなかれなんぢ患難
 にあふ日に兄弟の家にいることなかれ 親しき鄰は疏き兄弟に愈れり わが子よ智慧を得てわが心を悦ばせよ
 然ば我をそしる者に我こたふることを得ん 賢者は禍害を見てみづから避け 拙者はすゝみて罰をうく 人
 の保證をなす者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をば固くとらへよ 晨はやく起て大聲にその鄰を
 祝すれば却て呪詛と見なされん 相争ふ婦は雨ふる日に絶ずある雨漏のごとし これを制ふるものは風をお
 さふるがごとく 右の手に膏をつかむがごとし 鐵は鐵をとぐ 斯のごとくその友の面を研なり 無花果の樹
 をまもる者はその果をくらふ 主を貴ぶものは譽を得 水に照せば面と面と相肖るがごとく 人の心は人の心に
 似たり 陰府と沈淪とは飽ことなく 人の目もまた飽ことなし 坵塙によりて銀をためし 鑪によりて金をた
 めしその讚らるゝ所によりて人をためす なんぢ愚なる者を白にいれ 杵をもて麥と偕にこれを搗ともその愚
 は去らざるなり なんぢの羊の情況をよく知り なんぢの群に心を留めよ 富は永く保つものにあらず

いかで位は世々にたもたん 艸枯れ苗いで山の蔬菜あつめらる 羔羊はなんちの衣服を出し 牡羊は田圃を

買ふ價となり 牝羊の乳はおほくして汝となんぢの家人の糧となり 汝の女をやしなふにたる

第二十八章

悪者は逐ふ者なけれども逃げ 義者は獅子のごとくに勇まし 國の罪によりて侯伯多くなり 智くして知識ある人によりて國は長く保つ 弱者を虐ぐる貧人は糧をのこさざる暴しき雨のご

とし 律法を棄るものは悪者をほめ 律法を守る者はこれに敵す 悪人は義きことを覺らず エホバを求むる

者は凡の事をさとる 義しくあゆむ貧者は曲れる路をあゆむ 富者に愈る 律法を守る者は智子なり 放蕩

なる者に交るものは父を辱かしむ 利息と高利とをもてその財産を増すものは貧人をめぐむ者のために之を

たくはふるなり 耳をそむけて律法を聞ざる者はその祈すらも憎まる 義者を惡き道に惑す者はみづから

自己の阱に陥らん されど質直なる者は福祉をつぐべし 富者はおのれの目に自らを智慧ある者となす されど

聰明ある貧者は彼をはかり知る 義者の喜ぶときは大なる榮あり 悪者の起るときは民身を匿す その

罪を隠すものは榮ゆることなし 然ど認らはして之を離るゝ者は憐憫をうけん 恒に畏るゝ人は幸福なり その

心を剛愎にする者は災禍に陥るべし 貧しき民を治むるあしき侯伯は 吼る獅子あるひは飢たる熊のごとし

智からざる君はおほく暴虐をおこなふ 不義の利を惡む者は遐齡をうべし 人を殺してその血を心に負ふ

者は墓に奔るなり 人これを阻むること勿れ 義く行む者は救をえ 曲れる路に行む者は直に跌れん おのれ

の田地を耕す者は糧にあき 放蕩なる者に従ふものは貧乏に飽く 忠信なる人は多くの幸福をえ 速かに富を得

- イ詩一〇四・一四 永王上一八・一八、二 二七
- 口利二六・一七、三六 一 太三・七、一四 一 太三・一、二八、ル 亞七・一一 二二六
- 詩五三・五 四 弗五・一一 一八 一 詩六六・一八、一〇 傳一〇・六 二二八、二九・二
- ハ太一八・二八 へ詩九二・六 一 詩三九・三 九・七 傳一五・八 夕詩三三・三、五 約壹 二 太二・二六
- 二詩一〇・三、四九、ト約七・二七 哥前二、メ伯二七・一六、一七 一・八一・一〇 二 太二・二六
- 一八 羅一・三二 一 五 約壹二・二〇、 傳一三・二二 傳二 太六・三三 一 詩一六・八 傳三三 一 創九・六 出二一、
- 二二、二三・四、 二二
- 二二八・二二 提前六
- 九

本結一三・一九
 ク二八・二〇
 ヤ二七・五、六
 マ二八・九
 ケ二一三・一〇
 フ提前六・六
 申一五・七 儀一九
 二七、三三・九
 二八・二二、二九
 二二、二八・二二、
 二八
 代下 キ帖三・一五
 代下 キ帖三・一五
 二八
 三六・二六 儀一・
 二四一・二七
 サ帖八・一五 儀二一
 二六、二八・七 路
 一五・三三、三〇
 三伯二九・一六、三一・
 二〇、九一・八、
 九二・一
 二〇、二七・二一
 二〇、二八・二二、
 二六、二八・七 路
 一五・三三、三〇
 三伯二九・一六、三一・
 三・一四
 七十一六・一七 儀一
 二・二六、一四・三三
 二・二九・一七
 水儀一〇・一、一七・
 二二、二五
 八・二二、一四、一
 へ詩三七・三六、五八
 二九・一五
 二・一〇、九一・八、
 九二・一
 二・二六、一四・三三
 二・二九・一七
 水儀一〇・一、一七・
 二二、二五
 八・二二、一四、一
 へ詩三七・三六、五八
 二九・一五

二二 人とする者は罪を免れず 人を偏視るはよからず 人はたゞ一片のパンのために愆を犯すなり 悪目をもつ

二三 者は財をえんとて急がはしく却て貧窮のおのれに来るを知らず 人を誹むる者は舌をもて諂ふ者よりも大なる感謝をうく 父母の物を竊みて罪ならずといふ者は滅す者の友なり 心に貪る者は争端を起し エホバに

二四 倚頼むものは豊饒になるべし おのれの心を恃む者は愚なり 智慧をもて行む者は救をえん 貧者に賜す

二六 ものは乏しからずその目を掩ふ者は詛を受ること多し 悪者の起るときは人匿れ その滅るときは義者ます

二七 民よるこび 悪きもの權を掌らば民かなしむ 智慧を愛する人はその父を悦ばせ 妓婦に交る者は

二八 第二十九章 王は公義をもて國を堅うすされど租税を征收る者はこれを滅す その鄰近に諂ふ者はかれ

二九 脚の前に羅を張る 悪き人の罪の中には咎あり 然ど義者は歡び樂しむ 義きものは貧きものの訟を

三〇 かへりみる 然ど悪人は之を知ること願はず 嘲笑人は城邑を擾し 智慧ある者は怒をしづむ 智慧ある人

三一 おろかなる人と争へば或は怒り或は笑ひて休むことなし 血をながす人は直き人を悪むされど義き者は

三二 その生命を救はんことを求む 愚なる者はその怒をことごとく露はし 智慧ある者は之を心に藏む 君王

三三 もし虚偽の言を聴かばその臣みな悪し 貧者と苛酷者と借に世にをる エホバは彼等の目に光をあたへ給ふ

三四 眞實をもて弱者を審判する王はその位つねに堅く立つべし 鞭と誹責とは智慧をあたふ 任意になしおかれ

三五 たる子はその母を辱しむ 悪きもの多ければ罪も亦おほし 義者は彼等の傾覆をみん なんぢの子を懲せ

一八 さらば彼なんぢを安からしめ 又なんぢの心に喜樂を與へん 黙示なければ民は放肆にす 律法を守るものは

一九 福ひなり 僕は言をもて譴むるとも改めず 彼は知れども従はざればなり なんぢ言を謹まざる人を見しや

二〇 彼よりは却て愚なる者に望あり 僕をその幼なき時より柔かに育てなば終には子の如くならしめん 怒る

二一 人は争端を起し 憤ほる人は罪おほし 人の傲慢はおのれを卑くし 心に謙だる者は榮譽を得 盗人に黨する

二二 者はおのれの靈魂を惡むなり 彼は誓を聴けども説述べず 人を畏るれば害におちいる エホバをたのむ者は護

二三 られん 君の慈悲を求むる者はおほし 然れど人の事を定むるはエホバによる 不義をなす人は義者の惡む

二四 ところ 義くあゆむ人は惡者の惡むところなり

第三章

一 ヤケの子アグルの語なる箴言 かれイテエルにむかひて之をいへり 即ちイテエルとウカル

二 とにいへる所のものなり 我は人よりも愚なり 我には人の聰明あらず 我いまだ智慧をなら

三 ひ得ず またいまだ至聖きものを曉ることをえず 天に昇りまた降りし者は誰か 風をその掌中に聚めし者は

四 誰か水を衣につゝみし者は誰か 地のすべての限界を定めし者は誰か その名は何ぞ その子の名は何ぞ 汝これを

五 知るや 神の言はみな潔よし 神は彼を頼むものの盾なり 汝その言に加ふること勿れ 恐くは彼なん

六 ぢをせめ 又なんぢを誑る者となしたまはん われ二一の事をなんぢに求めたり 我が死ざる先にこれを

七 たまへ 即ち虚假と謊言とを我より離れしめ 我をして貧からしめず また富しめず 惟なくてならぬ糧をあたへ

八 給へ 我は我あきて神を知ずといひ エホバは誰なりやといはんことを恐れ また貧くして窃盜をなし 我が神の

- イ 傳前三・一 慶八・二 箴一五・一八、二六 二三・一二 路一四 へ利五・一
- 一・一、二 二二・一八、一四 ト則二二・二、二〇 又詩七三・三二
- 日 約二三・二七 箴一 亦伯二三・二九 箴一 徒二二・二三 雅四 二・二、一一
- 二・二五 五・三三 賽六六・二 六・一〇 彼前五・ 七時二〇・九 箴一九 ヲ伯三八・四 詩一〇 カ詩一八・三〇、八四・ 太六・一一
- ハ 箴二六・二二 但四・三〇、三一 太 五 六 四・三 賽四〇・二二 一一、一二五・九 一 申八・二二、一四、一
- 七、三一・二〇、三三 二五 尼九・二五、 二六 伯三一・二四、 二五、二八 何二三 六

ソ路一八・二一 倭六 未伯二九・一七 詩ナ詩一四・四 八・四 ム九・三二 利二〇 ウ鏡一九・一〇 傳ノ詩一〇四・一八
 ツ詩一三・二一 倭六 五二・二、五七・四 ラ鏡二七・二〇 哈二 九 鏡三〇・二〇、一〇七 才伯二一・五、四〇・四
 一七 倭二二・一八 倭二二・二一 五 二二・三二 半鏡六・六 傳八・三米七・一六

〇 名を汚さんことを恐るればなり 一〇 なんぢ僕をその主に讒ることなかれ 恐くは彼なんぢを誣ひてなんぢ罪
 二一 せられん 二二 その父を誣ひその母を祝せざる世類あり 二三 おのれの目に自らを潔者となして尙その汚穢を
 二四 滌はれざる世類あり 二五 また一の世類あり 嗚呼その眼はいかに高きぞや その瞼は昂れり 二六 その齒は劍のご
 二七 とくその牙は刃のごとき世類あり 彼等は貧き者を地より呑み 窮乏者を人の中より食ふ 二八 蛭に二人の女
 二九 あり 與へよ與へよと呼はる 飽ことを知ざるもの三あり 否な四あり 皆たれりといはず 一六すなは 即ち陰府姪まざる胎
 一七 水に満されざる地 足りといはざる火これなり 一七 おのれの父を嘲り母に従ふことをいやしとする眼は 谷の鴉こ
 一八 れを抜いだし 鷲の雛これを食はん 一八 わが奇とするもの三あり 否な四あり 共にわが識ざる者なり 一九すなは 即ち空
 二〇 にとぶ鷲の路 磐の上にはふ蛇の路 海にはしる舟の路 男の女にあふの路これなり 二〇 淫婦の途も亦しかり 彼は
 二一 食ひてその口を拭ひ われ悪きことを爲ざりきといふ 二二 地は三の者によりて震ふ 否な四の者によりて耐る
 二三 ことあたはざるなり 二三すなは 即ち僕たるもの王となるに因り 愚なるもの糲に飽るにより 二四 厭忌はれたる婦の嫁ぐに
 二四 より 婢女その主母に續に因りてなり 二四 地に四の物あり 微小といへども最智し 二五 蟻は力なき者なれども
 二五 その糲を夏のうちに備ふ 二六 山鼠は強からざれどもその室を磐につくる 二七 蝗は王なけれどもみな隊を立ていつ
 二八 守宮は手をもてつかまり 王の宮にをる 二九 善あゆむもの三あり 否な四あり 皆よく歩く 三〇 獸の中にて
 三〇 最も強くもろもろのもの の前より退かざる獅子 三一 肚帯せし戦馬 牡野羊 および當ること能はざる王これなり
 三二 汝もし愚にして自から高ぶり 或は悪きことを計らば 汝の手を口に當つべし 三三 それ乳を搾れば 乾酪いで
 三三 鼻を搾れば 血いで 怒を激ふれば 争端おこる

第三章

レムエル王のことば即ちその母の彼に教へし箴言なり
 一 わが子よ何を言んか わが胎の子
 よ何をいはんか 我が願ひて得たる子よ何をいはんか
 二 なんぢの力を女につひやすなかれ 王を
 滅すものに汝の途をまかす勿れ
 三 レムエルよ酒を飲は王の爲べき事に非ず 王の爲べき事にあらず 醇醪
 を求むるは牧伯の爲すべき事にあらず 恐くは酒を飲て律法をわすれ 且すべて惱まざる者
 四 審判を枉げん
 五 醇醪を亡びんとする者にあたへ酒を心の傷める者にあたへよ
 六 かれ飲てその貧窮をわすれ 復その苦楚を
 憶はざるべし
 七 なんぢ瘡者のため又すべての孤者の訟のために口をひらけ
 八 なんぢ口をひらきて義しき審判
 九 をなし貧者と窮乏者の訟を糺せ
 一〇 誰か賢き女を見出すことを得ん その價は眞珠よりも貴とし
 一一 その
 夫の心は彼を恃みその産業は乏しくならじ
 一二 彼が存命ふる間はそ夫に善事をなして悪き事をなさず
 一三 彼は羊の毛と麻とを求め 喜びて手から操き
 一四 商賈の舟のごとく遠き國よりその糧を運び
 一五 夜のあけぬ
 一六 先に起てその家人に糧をあたへ
 一七 その婢女に日用の分をあたふ
 一八 田畝をはかりて之を買ひ
 一九 その手の操作をもて
 葡萄園を植ゑ
 二〇 力をもて腰に帯し
 二一 その手を強くす
 二二 彼はその利潤の益あるを知る
 二三 その燈火は終夜きえず
 二四 かれ手紡線車にのべ
 二五 その指に紡錘をとり
 二六 手を負者
 二七 者にのべ
 二八 手を困苦者に舒ぶ
 二九 彼は家人の爲に
 雪をおそれず
 三〇 蓋その家人みな蕃紅の衣をきればなり
 三一 彼はおのれの爲に美しき褥子をつくり
 三二 細布と紫とを
 三三 もてその衣とせり
 三四 その夫はその地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知るゝなり
 三五 彼は細布の
 衣を製りてこれをうり
 三六 帯をつくりて商賈にあたふ
 三七 彼は筋力と尊貴とを衣とし且のちの日を笑ふ
 三八 彼は
 口を啓きて智慧をのぶ
 三九 仁愛の教誨その舌にあり
 四〇 かれはその家の事を鑿み
 四一 怠惰の糧を食はず
 四二 その衆子は

イ 箴三〇・一
 口 箴四九・一五
 ハ 箴五・九
 ニ 申一七・一七 尼一 水傳一〇・一七
 三 三二六 箴七・二六 ハ 何四・一一
 ト 詩一〇四・一五
 一 伯二九・一五、一六 又 利一九・一五 申一
 二 伯二九・一六
 三 箴二二・四、一八 力 路二二・四二
 四 二二、一九、二四 日 弗四・二八 來一三
 五 二七 耶二二・一六 王 羅二二・一一
 六 箴二二・四、一八 力 路二二・四二
 七 二二、一九、二四 日 弗四・二八 來一三
 八 二六

二九 起て彼を祝す その夫も彼を讃ていふ 賢く事をなす女子は多けれども 汝はすべての女子に愈れり 艶麗は
 三〇
 三二 いつはりなり 美色は呼吸のごとし 惟エホバを畏るゝ女は譽られん 三二 その手の操作の果をこれにあたへその
 行爲によりてこれを邑の門にほめよ

箴

言をはり